

# 第13回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第十三回「文芸思潮」現代詩賞に日本全国および海外から多数の御応募をいただきました。まことにありがとうございます。おかげさまで三九七名、一〇〇二篇の応募となり、充実した選考となりました。厚く御礼申し上げます。

五月末に締め切らせていただきました応募作の中から、まず予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、十月三十日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。今回は残念ながら最優秀賞当選作が選出できませんでしたが、優秀賞は前回よりも多彩で内容も濃い作品群になりました。また奨励賞・佳作・入選レベルの層も厚く、生きることや世界へのそれぞれの感情が強く作品に凝結されておりました。今号には優秀賞までを発表掲載させていただきますが、奨励賞および佳作の作品の中にも読んでいただきたい作品がたくさんありますので、それらの作品も、次号の「文芸思潮」誌上にできるだけ多く掲載させていただきます。予定です。

## 第13回「文芸思潮」現代詩賞

また事情により、今回の授賞式は省略させていただきました。賞状・記念品などは直接郵送させていただきます。深くお詫び申し上げます。

第十四回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で行なう予定です。どうぞ奮って御応募ください。心からお待ちしております。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

### 最優秀賞

該当作なし



### 優秀賞

「ドームの彼女」くらいくらいくらい  
「紅い饅頭」北森ミオ（広島県広島市）

「ソフトウエア」「早く帰れ!」「労働者たち・パート2」柏原 宥（埼玉県川越市）

「ぼくらの詩」「きみ以前、きみ以降」「ダサイポップソング」天ヶ谷麗（茨城県取手市）

「不変のローカ」「見るものだけが光の海に溶け去るように」「口紅の吐息に残る白亜の夢へ」

佐藤孝博（千葉県市川市）

「海神の鉤爪」花 縮砂（神奈川県横浜市）

「墮胎」「溺死」青木聡汰（東京都足立区）

### 奨励賞

「身震いをした拍子に」「春嵐」「連鎖」遠藤芳子（東京都狛江市）  
「凜」「戯れ」「ブルワ・アルバロ」今井 悠（宮城県仙台市）  
「踊る孔雀」「進化論または創造主の恩恵たる権利」「ある素粒子の描画方法について」嘉多山棗（大阪府大阪市）

「枇杷」「胎児」「安堵」麻生ゆり（福岡県北九州市）

「空襲」「翅いちまい」「左手の青穹」桐ヶ谷忍（東京都江戸川区）

「孤独の花弁」「母の風景」「記憶の吊いの日々のうちで」阿部静雄（NEW-YORK USA）

「球菜」See / Saw / Seen / 紫な行方」中村郁恵（北海道札幌市）

「シンクロニシティ」「瞑想」

由木名緒美（福島県会津若松市）

「核弾頭、しようがない」「ブラックの静物」

世秋恭之介（静岡県浜松市）

「光の庭Ⅰ」「光の庭Ⅱ」「光の庭Ⅲ」

浅見龍之介（埼玉県草加市）

「HⅡ \*アルテュールランボー」「HⅡへの返詩」「オーサカモナムール」水のようになりなさい」蒼井未龍（千葉県浦安市）

選評

ひとつの詩から発展するもの

松尾真由美

詩の作品にはさまざまな形がある。短いものや長いもの、行分け詩や散文詩、物語詩や機会詩その他、各々の作者が抱えるテーマ性やら詩質やらで自ずと詩の形も成り立ってくる。そこには作者の人生観や価値観や嗜好性などがまず先にあり（詩を開示するということはこうしたものを読者に曝している自覚を持つてほしい）、詩人と名づけられればひとつの塊で受けとめられるけれども、個人個人は別の人生を歩んでいるゆえに、詩は作者ごとに作られるゆえに、詩の可能性はひとりひとりに内包される。だから、詩の個性（個人ごと）は無尽蔵にあるといっても過言ではなく、また、現代においては歴史的な紆余曲折を経たあとの「何でもあり」というのが詩の状況であると言いきれるだろう。だが、「何でもあり」は「何でもいい」ではなく、個性の無尽蔵さも本源的なところがずれてしまっていては個性とは言えなくなる。結局のところ、どのような形で詩が表象されようとも、生活を営む上での自己の感受を詩の言葉で

研ぎ澄ますことで作品は成立する。簡単に言ってしまったが「自己の感受を詩の言葉で研ぎ澄ます」ことこそが非常にむずかしいことなのだ。感受したものが記憶となり、行分け詩の体裁をとっていても、その記憶が思い出のように語られていては詩ではなく（随筆を書いた方がいい）、記憶と想像力が結びついていなければ詩は動かず、事実だけの記憶から解放されなければ詩にはなれない。むしろ、事実だけの記憶から解放されるために詩はあって、そのために自分なりの詩の言葉が必要になってくる。そして、詩の言葉が先行することによって記憶が更新され、作者は己の記憶から再びながしのかの実体を発見する。こうして、新しい何かを加えられた詩の世界が創出されることになる。それは、既存の価値意識を打破することにもつながり、世の中や社会というものに抗する力ともなるのだが、その分、迎合は許されず詩の書き手は孤独である。

講評に移る。自分なりの詩の言葉を見出し、自分なりの詩の世界を創出できている人は多くなっているように思えたが、当選作はなかった。何人かはこの作者にとってベストな作品ではないだろうという判断が働いた。それだけ期待もしている。

優秀賞の花縮砂「海神の鉤爪」は作者独自の言語感覚が身につけていて、言葉のリズムもよく、心地よく詩の世界を堪能できた。海という場の設定がうまく機能しているのだが、作品を無理に終わらせている印象が残る。現代詩賞

佳作

- 「テロップ・右端」 「アナファイラキシーンシヨック」 小林 結
- 「竹林」 関根裕治
- 「みち」 後藤 順
- 「アンダルシアの欠片」 つるはげ
- 「虚空／日暮れ／仙人掌」 高橋朋央
- 「空き地から秘密の星座へ」 「カベヌケ」 「幻のざりざりライダー」 藤原ジュン
- 「おい」 「並べてみたら」 「あなたへ」 高橋実里
- 「悪の華 善悪のセコンド」 「インナーチャイルド病める茨薔薇」 西條由美子
- 「根を張る愛の種子」 「真夜中の戦争」 「光」 Keisell
- 「母」 「ひまわり」 「容赦」 まるいうさぎ
- 「水」 「蝙蝠」 「憧れ」 遊月飛鳥
- 「思考の翼」 「魂のブラウス」 いしげきいこ 辻本 瞬
- 「糸物語」 「やみはひらく」
- 「隕石の記憶」 「小石の思想」 「石棺」 辻武比古
- 「歩く人」 「死ぬにはいい月」 「夜の音」 郷原慶子
- 「失墜の白濁」 「暗黒の華」 「鉄砲の音域」 大山日文
- 「基軸」 「長い坂道を」 織月景
- 「風と鳥」 「夕やけ」 「街灯」 はるた
- 「夜の病 魚たち」 「ロシナンテは走らない」 「空の軋みから呼んでみたい気がする」 日野笙子
- 「心臓」 「海」 「露」 行待文哉
- 「雑草」 「リミット」 徳永江梨子
- 「遙遠」 「夢をみていた」 「滅び」 インバ
- 「夕陽に顔面」 「妻の夫」 「ふあんしーあいらんど」 渡辺八暈
- 「ヒマラヤにふる雨」 「ゆきがふる」 「たそがれ」 珠望
- 「直交座標系の彷徨」 嶋ひろし
- 「ひとりであること」 「Fを想う」 「詩人宣言」 タナカジュリ
- 「茨」 「送別」 「思い出の中で会いましょう」 てづかかなこ
- 「母の合わせ絵」 「赤い風船」 五十月彩
- 「愛・運命・風説」 「アネモネ順不同」 「麦わら帽子のうた」 西島 颯

入選

に送るために作品の長さを調整したのかは分からないが、言語感覚と場の設定がとも合っているので一冊の詩集にするつもりで作品を書き継いでいってほしい。一篇の完結でなくとも詩の選考はするつもりがあるので次の段階が気になるけれども、詩集として考えるかどうかは本人の自由に任せる。優秀賞の青木聡汰「墮胎」は書記における身体性のあらわれが擬音を成功させ、胎児という象徴性と同期して説得力を感じさせた。言葉の動きで対象を解放していく方法は正しく清々しい。四連目から言葉の自在さや自由さを読者も楽しめるが、その手続きとしての二連、三連が弱い。行分けの凝縮性というよりも表現が舌つ足らずになつてしまつていて惜しく思えた。優秀賞の北森ミオ「ドームの彼女」の長い一行のセンスの良さには驚かされた。あとの二篇「くらいくらいくらい」「紅い饅頭」もおそらくヒロシマの原爆をテーマにしているだろうが、そのテーマを赤裸々に語るのではなく柔らかに優しい詩の表象となつているところに、この問題に対しての作者の内省の深さを感じさせる。言葉の流れ方からいって作品としてはもう少し展開がほしいのだが、こうした作品をまとめれば良い詩集ができると思う。優秀賞の藤代ヨウ「ぼくらの詩」は歩行的な感覚が主体と一体になつていて若々しさも感じさせ、ゆえに疑問符が効果的に使われる。発語の元気がこの作者の長所だと思いが、若々しさが幼稚さとすり替えられる危うさもある。そのことを意識すること。優秀賞の柏原有

選評

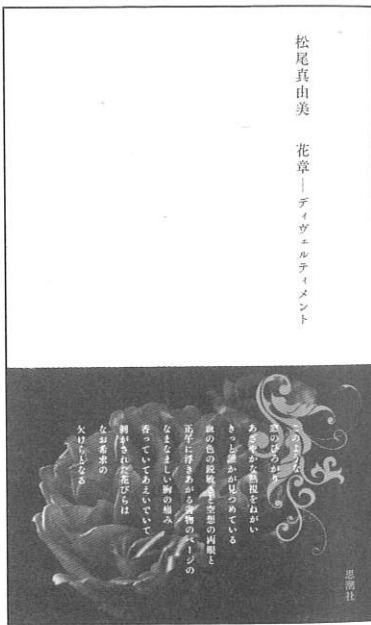
「労働者たち・パート2」は社会への批判をスムーズに流れる言葉によって語っている。労働者とリーダーを対置することで鮮明になる世の矛盾やそのための怒りもリズムカールに描くことにより悲惨を自己のものとする。そのことで詩に救われる現実が読者には見える。時代への異和をどこまで持続できるかが問われてくるだろう。優秀賞の佐藤孝博「口紅の吐息に残る白亜の夢へ」は漢語の多用と異空間を作り出す力に強い個性を感じた。徐々に展開させていく詩形体なので言葉の量は多くなるが、形容しすぎの箇所もある。たとえば一連目「垂れ流れる涎」は涎は垂れ流れるものなので「涎の既決は」で始まつていい。こうしたことに注意して作品を見直してほしい。

奨励賞の浅見龍之介「光の庭Ⅱ」の他者への語りかけに好感を持った。三篇の中では一番独自の庭を表出していると思う。今回は「光の庭」シリーズ三篇が送られてきて、タイトル通りに光に満ちた庭が美しく表現されているのだが、浅見の以前の詩を知っている者としては綺麗なかだけでは物足りない。もっと書き込めるようなテーマ性を求めた方がいゝ。奨励賞の「中村郁恵」[See / Saw / Seen]。以前の作品よりも現実を凝視する方向性が見受けられた。丁寧に景色を眺める意図が感じられ、そこから何をくみ取ることが重要であるのだが、最後の連で一挙に想像力を発揮したことでこの作品に上質な詩情を与えている。奨励賞の世秋恭之介「ブラックの静物」は小タイトルにイメージを作

- 「灰色の墮天使」「純の踏破」「自戒(非対称)」 獅子谷雪
- 「定め無価値」「木彫りの人形」「銀色の水が僕を侵食する」 真田真子
- 「蟲」「舟」「風船の行き先」 恵
- 「母は言った」 寒川靖子
- 「時への感覚」「息を切らさずに」「逝く姿」 横井純子
- 「切れ長の目」 金泉碧
- 「吹き矢とジョークと皆殺しの仮面」「有刺鉄線と紅い季節」「青信号を渡らない赤子」 北村灰色
- 「一つのふめいの時代」「散策ひとつ」 無限墓場
- 「水鏡」「リストカット」「登校」 福島敏真
- 「秋風の処女」 青瀬勇魚
- 「昔話」「夢景色」「カーテン」 伊勢谷翔
- 「秋の夜」「畢生」「金魚」 山岡真緒
- 「遺体ホテル」「五月の午睡」「森」 飯塚彩夏
- 「僕の血潮は海」「月と人工衛星」「それでも僕は」 池山弘徳
- 「パパは目が見えないんだよ」「ジャスミン」「始まり」 中川旭洋
- 「向かう先」「道なき道の道標」「慟哭」 中原夕莉
- 「ささくれ」「なんじゃらもんじゃら」「のに」ちゃん」 中川旭洋



松尾真由美  
まつお まゆみ  
詩集『燭花』(思潮社)  
詩集『密約—オブリガート』  
(思潮社) 第52回H氏賞受賞  
詩集『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』『彩管譜—コンチェルティ—』『睡濫』『不完全協和音 consonanza inperfetto』『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊のはるかな記憶を』(いずれも思潮社刊)  
BOX詩集個展用パンフレット詩集『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』現代詩文庫『松尾真由美詩集』(思潮社) 詩集『花章—ディヴェルティメント』(思潮社) アンソロジー『現代詩最前線』(北溟社)『小野十三郎を読む』(思潮社)『短篇集 夜』(驢馬出版)『ふるさと文学さんぽ 北海道』(大和書房) 北海道新聞文学賞(詩部門) 選考委員



松尾真由美新詩集  
『花章—ディヴェルティメント』(思潮社)



っていき、その連続が「ブラックの静物」として提示されているが、この形式もひとつの詩作品としてではなく、小タイトルのものをいくつも書いて詩集としてまとめたら面白いものが出来ると思う。沢山書くには想像力がある。本人次第がそうしたやり方もある。奨励賞の今井悠「ブルワ・アルパロ」は三篇の中で一番良いように思った。対象との距離感が落ち着いて取れていて、主観と客観のバランスがいい。素直さと虚構性が不思議に融合し、魅力ある作品となっている。

## 未来への力

### 五十嵐勉

第十三回「文芸思潮」現代詩賞は残念ながら最優秀賞は出なかった。しかし最もそれに近い位置にあったのは佐藤孝博氏の作品だった。私としては、これが最高点で、受賞してもいいと思う。選考会に望んだが、松尾選考委員の評価が低く、推しきれなかった。言葉に込める認識の重みや、連綿と言葉を紡ぎ繋げていく不撓の持続力は、大いなるうねりの可能性を孕んで、規模の大きい詩想を感じさせる。本気になって取り組めば一角の詩人として立っていきそうなパワーをも覚える。ただ、読み込んでいくと、腰が坐っていき、やや言葉の舞に酔う箇所も見受けられる。

て、問題に対する切り込みを鋭くしていた。こうした現代の本質に迫る詩は稀有で、真の危機を見つめて詩に昇華させるのは至難の技と言っている。これは氏がパソコンなど現代の機器に精通しているからこそ見えている世界で、この警告はまったく正しい。近い将来、我々は機械に使われるようになるかもしれない。これまでのどんな革命よりももっと深刻な、本来の人間の自由が許されない世界がすぐそこまで来ている。詩が機械によって作られる時代は遠くない。そういうものに抵抗するものが詩であることを指針している点からも、氏の詩はもっと評価されるべきだろう。

花縮砂氏の「海神の鉤爪」は一篇だけで勝負を賭けてきた問題作ではある。ここにあるのは日本語を破壊して再構築しようとする根本的な挑戦である。これは野心というべきか、もともとのできそこない日本語を宿命の根として負っている出自ゆえか、模糊とした魅力が潜んでいる。この詩には確かに見慣れない日本語群がある。破壊された日本語の死骸によって造り上げられた豪華な珊瑚礁の印象だ。この奇種がしかし新鮮である。思いがけない連想の花が咲き乱れる。日本語が壊される不愉快さと新鮮な煌めきとが共存している。流れのなさを奇ととるか新ととるか、日本の土地から離れた亜種新生日本人の産声が聞こえてくる。日本はいらない。日本語という記号だけがあればいい。それは壊れて新しい記号になる。地球上に流布する新記号が

「愛を知らずに愛を欲して愛のままに」という平俗的なところがあると思えば、逆に「浄めの月は夜毎に満ちて／母子孕む血の戯れ／幾世もの性の汚辱を喚呼して」また「魂の揺らぎは浄利の蝶が舞い散る／人が人でなくなることにへの万象の囁きである」と肯う」のような伐採力を感じるところもある。落差が共存するこれはおそらく推敲が足りないことに起因するのではないかと想われるが、これを磨き上げて光るものにできるかどうか、この作者の岐路になるだろう。とりあえず詩人としても立ってみるのかどうか、この姿勢が今後を大きく左右しそうな気がする。小さくまとまらず、みんな咲かせてみせるくらいの意気込みがないと、映画など他の分野でも成功しないだろう。三つの詩のうちの一つは「不変のローカ」というタイトルだが、この「ローカ」の意味がわからない。廊下なのか、老化をけているのか、判然としないところも、弱点になっている。三つの作品の中では「口紅の吐息に残る白亜の夢へ」を最も評価するが、最後の盛り上がりど決めがやや弱い印象も残る。しかしこの言葉の紡績力は何かになっていきそうな大きな可能性を感じさせる。一つの持続を追っていけば、他の分野でもまとめて大輪の花を咲かせそうな潜在的なパワーを覚える。今回最も印象に残った詩だった。

また優秀賞の柏原宥氏の現代に潜む機械の狂気を警告する詩は、前回の奨励賞作品よりもいっそう深化して、しかもいくつもの側面からそれぞれ訴えている多面化も備えて進んでいる。だれも踏み込んだことがない領域なので、相当な壁や苦闘を乗り越えなければならぬだろうが、咲けば大輪となる。将来を楽しみにしている。

藤代ヨウ氏の「ぼくらの詩」は言葉が以前よりもはるかに大胆に、雄勁に躍っている。たんに詩を書くとか、詩を作ろうという意識を超えて、内部の躍動に任せているところが、詩を自由にした。言葉が力を持って弾んでいる。言い切りに淀みがない。多重的な構成も生きている。「五感がバリケードする部屋の隅で」などという表現もいい。難を言えば「ぼくらの詩」というタイトルが一般的すぎる。これがタイトルなら、ほとんどの詩がこのタイトルになってしまう。個別性が喪失されたタイトルはいただけでない。名前も頼りない。

北森ミオ氏の三篇の詩をどう見るかは評価が別れる。私



いがらし つとむ

- 1949 山梨県生まれ  
79「流瀆の鳥」で群像新人長編小説賞受賞  
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞  
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞  
他に「ノンちゃん、NONGCHAN / 聖丘寺院へ」「破壊者たち」評伝「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」など

は「ドームの彼女」を最も高く位置づけ、「半円球的歴史  
的あんぶれらは地上が忘我する感覚形象でしかここに在り  
得ず」などという表現はおもしろいと思ったが、これが原  
爆の詩とすると俄然深刻さが覆い被さって来る。原爆の熱  
や火事の熱で皆元安川に飛び込んだ過去の被爆の事実が随  
所に散りばめられていて、この怒りと怨恨の引き摺りがト  
ーンとして底に流れているからである。それゆえ訴える力  
は強いが、詩としての造形力となると、もう一つ構築性が  
足りない気がする。そして他の二篇の詩も、原爆で死んだ  
子どもの冥界との交信であるとするなら、訴追力が加わっ  
ていっそう深みを増してくる。呪わしさや恨みが付加され  
るからである。「どこが痛い」という問いの意味も深ま  
る。「紅い饅頭」もそれに繋がっているとすれば、同じこ  
とと言える。しかし私とすればこういう含蓄的な表現をす  
るよりは、真っ直ぐ正面からぶつけてほしい。原爆への怒  
りはもつと大きく直接に多くの人に広がっていくものであ  
ってほしいと思うからである。

青木聡汰氏の詩は前回よりもはるかに展開力が増してい  
る。胎児の視点を取り入れて世界風景を浮かび上がらせて  
いる構想は遠大な時間をも含めて、氏のモチーフに深く繋  
がっているが、音符マークを入れたりしているのが格調を  
壊した。作る手つきがそここに透けて見え、せつかくの  
創意をやや浅くしている。氏の地球史規模の時間感覚は発  
想の母体をなしている、新鮮ではあるが、迫力に欠ける。

言語感覚の確かさを保持している。この鋭い知性の魅力  
は信頼に値する。

麻生ゆり氏の安定した力はさすがだが、動きが鈍くなっ  
ている。清澄な音色が聞こえるところは一つの深化であ  
り、到達の途中とも思えるので、このまま持続してほしい。

桐ヶ谷忍氏の「左手の蒼穹」はよい。体験を想わせる重  
い言葉は容赦なく胸に食い込んでくる。「切り取った雲一  
つない青空を／私の傷口に深く埋めてくれた」というとこ  
ろなど、鮮烈である。この切り口の鮮やかさは作者ならで  
はの表現で、永く残る。小説も書けそうな才能を感じる。  
アメリカ在住の阿部静雄氏の詩は「母」を歌っている。

一貫してその存在の根を追求している筆致は切実で引き続  
けられている。透明な純粹さの光を帯びて根源に遡及しよ  
うとする切望がある。鮭の、川の源流への遡行感に似て、生  
を遡る精神運動は同時に自分の死を見つめる行為でもあ  
る。それがすがすがしい源泉への回帰となって隔たった時  
空の奥底に迫る。その切実さは輝いている。

ここに取り上げられなかった作品のなかにも、光るもの  
が多々あった。昨年入選、選外にあった人も今回優秀賞に  
上がってきた。逆に不調の人もいる。結果は結果として受  
け入れると同時に、それ以上に世界と生きることに向かい  
合い、詩作によって生の意味を深める行為を続けていって  
ほしい。次回の応募を期待している。

実感としての時間感覚がリアルにここに繋がってくれば、  
もつと言葉に勁き加わり、本物になっていくだろう。着  
想と視点の鮮やかさが、美しさに流れる傾向をいかに抑え  
て真の叫びを乗せていくかが今後の課題だろう。

奨励賞も多彩である。

今井悠氏は全体に力を上げていて、三作とも深化が感じ  
られる。古典調を駆使しているのは悪くないが、それに寄  
り掛かり過ぎると、パターン化の弊害を生むことに注意し  
てほしい。「ブルワ・アルパロ」が最もよく、言葉が流麗  
に律動している点も魅力がある。

遠藤芳子氏の詩は、過去の深い傷から独立して詩が立ち  
上がってきている。言葉が詩の躍動感を帯びてきている。  
回復の方向へ少なくとも言葉が向かっていて、歩み出す希  
望を感じる。その自立の光を感じるところに重みがある。

蒼井未龍氏の「HII」は、力動感があつていいが、ラン  
ポーに寄り沿って書くところには、どうしてもそれ以上に  
はならない弱みが露呈する。その点「オーサカモナムール」  
のほうがいいが、逆にこの詩が「オーサカ」である必然性  
はどこにもなく、「ナゴヤ」でもいい、根柢の希薄性が露  
わになつていく。全体に前回よりも弱くなった。

由木名緒美氏も前回優秀賞だったが、弱くなった点は共  
通している。途中に「のです」と急に優しくなるのは、詩  
の緊張感を損ねている。しかし「蟻塚のような街並みは理  
想の集約を産み落とす」という表現は、的確でものを捉え



選考会風景

# 口紅の吐息に残る白亜の夢へ

佐藤孝博

陽へ穿つ電線鉄塔から忘我で魔されていく先刻の眼  
流れる涎の既決は夢の在り処であると悟り  
洗濯物のはためきさえ幻となり  
耳鳴りのペランダに青空を託す母親の抱擁への慟哭に  
名伏しがたき性の糸を嚙む呼水の記憶へ  
昏き芙蓉の子は眠りのうちに  
ゲノムの楽園について語りはじめ  
夕餉時の粥に揺蕩う人の悪の仄暗さ  
客人との沈黙が腑を刺し違える  
常世より去る鶯の鳴き声は  
天鼓の響きとなって山峰を遠のき  
手入れのされた白い庭の花群には生来の哀しみが  
子午線からの薄光にゆたかな時を刻んで  
あの頃の誰しもの素面の経緯には  
野山の茂みを棲家として生きた祖が憶い  
夢枕に業の報いを明け渡す靈魂が  
触れえぬ心の熾火があった

軒裏の崖底を流れる闇の水の雫となり  
深淵へと墮ちていった不可解な肉体は蘇生を繰り返す  
聖なる符号を螺旋のアルゴリズムに介して  
母の胎内で眠る夢のつづきが  
母なき現実という虚構を演じながら  
蛾の群れ集う外灯から降り注ぐ無分別な光を浴びて  
突如迫る虚しさに明日への奇蹟を祈り  
この世に齎された命の孤独を見つめていた  
滅びゆく希望へ羽撃く運命のあまりの眩さで酔い痴れ  
ユスリカの音辿る故郷の掟に繋がれた老婆の掌  
醜い美德から若き追憶の圈へと導かれて  
晩夏を駆ける光の子供は原子の妄りな渦となり  
変容を遂げた蝶の息の潰えた世界を夢見る  
風景と鼓動との楔が死生の風を露わに  
思うことすらままならなかった  
夜の帳に向かうにつれ

罅割れた裸体に傳く女の鏡の中への憧れに  
しとしとと降りやまぬ虚無の時雨は足もとを絆し  
陽は照らす肌あることの定めへと幻にたじろぐ夢の間で  
少年でありつづける天の子が性に明け暮れ  
五体のともなわない日輪の兆しよりまだ見ぬ喜びの楽を与えている

優秀賞



日々への恙無さに淀みなき点晴が不滅の力の如く漲り  
留まらぬ肉塊の不具を呼吸のように現せども  
その袂の命は神珠の涙を流し続ける

真昼の雛は太陽の曆石に刻まれ

一つ目の煌より垂れ流れる過去への遺産

蠟燭の消えゆく炎に瞬く我

遡る戦慄の業火と化して彷徨える

近代史のレクイエムは終わりを告げて

脳で肉体を愛撫する盲目の羊たちは

舌先から溶け出す羨望の彼方

豊穣なる宇宙の記憶を忘れ

非知を戯れる全貌の間の名の元に

馥郁とした数奇な風となり

誰のものでもない窓の外で明滅する

現象世界たちの死の瞬間を戦ぎ息づいていた

水に濡れた石にそれを拾う手に

浴びる陽のぬくもりに遮る鳥の目の中に

姿形あるものの本然を定めとした大いなる因果律が

それすらも超越するための屈託のない赤子の無垢を宿している

時おり見る純粹無垢な目覚めの朝に

恐れを抱く夜の匂いに

渺漠とした時空を神とするならば

死をもって償う憐れみ哀歎の生涯という

輪廻の砂塵でしかない劫の儚き意識の連続性を

縁起の繁茂する事物の兆しの歯車に預け

無へと帰らんとする禊の月光となり

魂のゆらぎは淨刹の蝶が舞い散る

人が人でなくなることにの万象の囁きであると肯う

吐血した雪国に滲む血の凝る愛が

やがて消えゆく幻となり性の夢に溶けて

男と女の楽園は名もなき者たちの希む唯一の出自だった

心交わす精妙な糸のほつれを嘆き

舌と肌とのぬくもりで孤独な眠りにつく

どちらとも定かでないあるべき姿へ

ふたつの至極の炎の連なりが燃え広がるひとつの漣となり

内なる架空の大伽藍で残された吐息と共に失われる

静謐なるままに世界はなしくずしに滅びゆく

誰も知らずに紡がれる命の寿ぎに

仇なす己の弱さを焼べて

赤く濁る唇は美しい

## 受賞の言葉

何故、詩なのか。何故、詩人として今に至るのか。何故、詩を書かねばならないのか——一四の頃から作家を志して、小説を書き続けるも作品として完結することなく中途挫折し、未完の美と芸術を求めて詩へ転向した。書き続ける中で未熟ながらも、常に対象としてあったのは巨人・中上健次だった。

中上は二九歳で「岬」により芥川賞を受賞、それより二年後に「枯木灘」を書き終えた。「枯木灘」は、近代文学の傑作だ。僕はいまだに彼を超える作家を知らない。中上は「岬」受賞の際、「吹きこぼれるように、物を書きたい。いや、在りたい」と言葉を残している。僕は書けているか、吹きこぼれるように、夭逝する炎のように。そう在るか、彼の命そのもののように、大いなる物語たちのように。僕は僕自身の命を生きなければならぬ。「繁茂する南」として在り続けた中上とは別の、もはや命ですらない、詩の無限宇宙の寂寞を。

栄えある賞を授与頂き、誠にありがとうございます。これまでご縁を頂いた方々、支えてくれたすべての皆様様に感謝します。

佐藤孝博

さとう たかひろ

1982年生まれ 千葉県在住  
日本映画大学卒業  
日本空手道連盟二段  
映画製作に携る傍ら、小説を執筆  
映画業界から去ることをきっかけに  
詩へ転向  
現在に至る



# ソフトウェア

「ITシステムは、国民生活の基盤として適用を拡大していますが、ソフトウェアの大規模化・複雑化も相まって、その不具合や関連トラブルが報道されており、信頼性向上が喫緊の課題となっています」

IPA 独立行政法人 情報処理推進機構

「ソフトウェア産業の実態把握に関する調査」—速報版— より

統一化された部品を組み立て画一化された完成品を量産する近代工業化の余韻

小さな完成品に組み込まれたソフトウェア

恐るべき処理スピード（一秒間に数千万回）

夥しい量のプログラム（一説には数百万行）

その全容はもはや 人間が把握できる限界を超えている

それでも相変わらずのスローガン

高品質！ 低コスト！ 短納期！

完成品には 多機能！ 高性能！ 低価格！

どれをとっても矛盾だらけ ゴールなきゴールに向かって

完成品メーカーと部品メーカーの美しくも巨大な

ソフトウェア集団のピラミッドが

更なる膨張をつづけている

ソフトウェアとは何か？

ピラミッドの頂点から洪水のように溢れ出た人間の言葉

誤解 矛盾 曖昧 過剰（大量の言葉の混沌とした状態から）  
共有 交渉 合意 理解（さまざまな背景や利害をのり越え）  
なんとか纏め上げられた数百万行の言葉

その言葉の塊 絶望的な荒野

その荒野に潜むたった一行の欠陥

どこに潜むとも知れぬ小さな悪魔が

ある日突然あばれだす そんな

ハイリスクを背負って

ソフトウェアは今日も

無言に 大量に

いともたやすく コピーされてゆく

効率的なのか非効率なのか

だれもその答えを見出せないまま

人間の言葉の塊は ピラミッドの組織のなかで

あるいは完成品を使用する社会のなかで

あるいは止められない時間のなかで

不気味な膨張をつづけている

高品質！ 低コスト！ 短納期！

完成品には 多機能！ 高性能！ 低価格！

そんなゴールなきゴールに向かって



柏原 宥  
かいばら ゆう  
1965年 埼玉県川口市生まれ  
システムエンジニア  
2016 第12回「文芸思潮」現代詩賞  
奨励賞受賞

## 優秀賞

## 柏原 宥

### 受賞の言葉

格差が広がる社会のなかで搾取されてきたものは金銭や時間だけではない。人生の意味までも搾取されつつある。それでも、多くの人々が、労働者として、忍耐強く生きている。もしかしたら、リルケやランボーが生きた時代の「パリ」と、現代の「東京」は似ているのかもしれない。詩作を通じて現代社会を見つめていきたい。この賞を励みにますます精進します。ありがとうございます。



## 海神の鉤爪

花  
縮砂

海の獣と未収録なわたしを分類して。

もの珍しげに邪険にしたら、振じれた恥じらい、海の、フリルなすわたし、この生態をおしはかつて。底は沈澱んでいて、興味ほんいが、しらしらと溶けていた。仮死しながら小瓶の標本のうえ。しにたえる棲か、生命類いの、珍種の飾りは拙く、未発見だから嚙んでただ流れ去ってしまえば。苔みの冥想、プラチナいろに富んだ国土——だったと思えば、きぐしゆ、身動きせずにとだ流れ去る深海の底にて。そこ昏さのなかに、無辜な海月の躰とおぼしき、縹渺ゆるゆら、ふしゆびな袴りにかけ隔てられつつ、

わたしは世界を胞胚す。

胎芽より未熟だった。しばらくすると黙り込む、いつの記憶が割れたのか。栩々、栩々調い立った鱗が、躰じゆうに群生すれば、糠喜びの鱗片は、挽ぎ取り、碎き去れ。嫌イと言う字、肌に残すまで引つ掻けば、泡立つ真珠、それはやがて剥がれて息を失ってしまう、むやみ心の温度のひよう皮、逆上せ色より擦り傷残して擲めたがった。やはり口惜しくて、濃い嫌イ聖の濃い色、いな、と透明色をなげかけ落ちる。神聖不可侵に触れない恋をした、嫌いな深淵ずまいの生き物は、真珠貝やら白々しい光の屑で、つまらなく光合成ができてしまう、聖ゆえにとなのに愚かなわたしは、

空洞な細胞の獣の胎芽を欲する。

月が重いせい。息のむ灰色の石灰質の鹹水を茸く、水面を戴いた、滲んでゆく、貴方を宿したかったって胎の、洞窟のような、遠音。獣は爪の月のした、海星の容を、して、甲羅のこわばりを、して、温か海神、撫でおろす。海には爪痕、余波ると余波らぬ、一生涯をさざめかすともたじろぎ、さんざめき、消え果てる。銀灰色は時に変わらず、正体のなき、ものにやさしく、瞳にきんと落つ熱い雫の膜は散ってゆゆしく、真空にとどかないままで。瓶の辟易ぐコルクはずせば、

古いカタチは貌を失くして、死文となって風化している、アナタニナリタカッタ。

海食棚に寄せ還す、標本図書館には、きぐしゆに閑す日誌の束が処狭しと並ぶ眩しい。喩えば其処には、芽で覆われホろびて、なおも最初と最後だけ満ち忘れて朽ちてゆく、きぐしゆ、眠りの淵にもあったのか、まほろばへと求愛鳴いて遣していかれた。

下手くそな文字。

鈍れ、犇めく、錘の鋒、覚束無い。深沈風ぐ、よこたわる、嘗てたしかにあったはずだった。緊とさる未らいの記憶の破片が、気胞の透き間に入り込んだような神秘に微笑み、ふつと遠のき、零れたく、ない、毀れたく、抱かれるつねは誰かの熱さえ。過去や未らいのごとくある可笑しな躊躇いを、海の白さに忘れかけ、たぐり寄せるみたいに、遊泳翳りゆく翼からもれでる波光と貴方の小鳴き、泡沫人おめでとう。淵底のがらんどうの鍾乳洞で、わたしは胎芽たちの葉緑素を幾つかおし潰して、

いろとりどりの微光の懺悔をした。

きぐしゆゆく神殿よりて、貴方も熱い膜から硝子粒を吹いたかもしれない。わたしのサテンの躰から曇った鱗は落ち滾り、縫い目がほつれたら、おりふしシクシク傷ましい嫌いの文字、嘴からほろほろ漏れでたなどは。錆ついたくちあたりがした。それを溜め息と同意義にうべなえば、ぷぷぷと、点滅、きえる、ひとり。深海は無愛想。ふしゆびな袴りが落ち込むさきの沈んだ神殿たちの街はカタチを廃れ、標本図書館へ、船出の聖はふじつばの発光体に息がまつていた。天には、さまたげなんてなにもなかった。

天の海は暗黒部だと囁かれた、なりそこないぶつかりあった。

その窪んだ月海に建ち続けてきた破片の像。月がみてきた獣の像はみおろされ、しおらしげな獸心をこの生息を、結局ひとと言えは無形の変わりゆくひとと言えは恐ろしい。時たま言葉に錨は海底けずり、砂の粒は文とめおいて、わたしの神殿なぎたおせ、白帆を風にあずけて貴方は行ってしまうのに、

オンナノコハスカレルノガイチバン

って海神の母が言う。哀鳴とよめく最果てのほど深く、海底はみめよくゆらぐから。興味ほんい、でもよかった。と不平をいう渦動から、マリン・スノーの幻想美をも纏わした、ちらちらプランクトンの死骸が降ってくる。わたしが此れ迄食し、たぐり込んで来た、夥しいほどの心と言葉と記憶。なぎがらは、なぎがらでも、深海無限メートルに天を仰ぎ続ける還る場所、嫌イ聖がひとり棲む、まほろばなんかではなく、惑星状星雲みたいな熱っぽく、触れられない心臓を

持っていたならばすべて美しかった。飛散した、太陽かけら、ほんとは大きな惑星と、溶けかたまったりなんては、できなかつたのなりそこない。ひびの珊瑚の心も、溶けかたまったりなんては、できなかつたのなりそこない。まことは死んで、いてもなお、つもった記憶に芯、熱を抱く。紅きむし、樹枝の群体、いきながら創りなおしてゆく。記憶に添って。残った胎芽たちが、銀色の鳶を海底から夜にむかつてのばしてゆく。 anatanotameni. anatanotameni

神聖不可侵に触れて生きて。

邪険の奥に忘れ角を腐乱させ、はじめかしく獸冥利はそこ光れるやわらかな。 watahinotameni. 銀色の胎芽の鳶が密生し天にも雲に陸をつくる、その陸のうえ、漣の、フリルのスカート、裾をつまんで、風の姿になれば未発見、とわたしを絶滅すれば鉤爪くらいは、春をさきどりします。 晩の漂流、まほろばより天地がぬきとられ、夜明けとともに天地が胎動のうろくずをみた。

## 受賞の言葉

この度は優秀賞を頂き大変光栄に思います。これを励みに詩作に向き合ってゆく契機としたく存じます。花縮砂として初めて印字される『海神の鉤爪』は、未熟だった大学生当時の感性を推敲に推敲を重ね、形にしたものです。私にとりまして思い入れのある作品だった為に、沢山の方々に読んで頂きたく願っております。皆様のところに海の獣の生きた小世界が、少しでも届けられればと思います。ここに衷心より感謝申し上げます。



花縮砂

はな しゆくしや

1989年8月13日生まれ。神奈川県横浜市出身。幼少期をイラン、小学校中学校時代はアラブ首長国連邦、イギリスで育ち帰国。国際基督教大学高等学校を経て、2016年に早稲田大学国際教養学部を卒業、今日に至る。





永久巡礼 墜落畏怖スペクトルだけが  
微動している

…Genom

慟哭が聴こえなくなった

望遠光を吸引するブラックホールが観測され

どこまで落ちてでもホワイトノイズが その無限周波数が秘匿するから

虐殺の瞬間を描こうとして散乱した瓦礫を見た 0.53210975 秒後に眼を失った少女の

話す瓦礫の「白さ」こそあらゆる頁の深奥に広がる白さよりもさらに語れ得ぬ純白と透明との

断層が口唇となつて「望まれた子を…」という声を漏らす

しかしその結末は掻き消されて

すべての地図上からも

喚び起こせなかった

それでも

都市の胎児は微笑み続ける

轟音の中でいつまで身構えても爆撃は来なかったので

そのうち眠ってしまった彼の放った自らを完全透過した水の夢のなかの魚雷が

2800℃の水の覚醒によって凍結撃破されたとき

二万四千年は閉ざされぬであろう

水死体の眼が開く

水ダ！熱イ！熱イ！水ダ！

メルトダウン メルトダウン 骨髄の深潭からメルトダウン

ホワイトノイズ：啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……

…全ての周波数を含んだ雑音である」啞……啞……啞……ノイズズズ、ズズズズ、ズズズズズ、

ホワイトノイズ、「すべて」の波のただひとつ「罪:sin」のSin波よ

沸騰波ブラウン運動とブラウン運動の…無名粒子の激突

ここは全球祈禱の淵か

死光

一瞬のしじま

その人工胎児の咽喉内を

墜落者は重力を孕みながら無限に加速していく

——あと3cm 手を伸ばせば、落ちなかったかもしれない——

中間がない……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……啞……

鐘楼の血飛沫を浴びるがまま……啞啞啞啞……

ただただ……密殺されていった……

Sota Aoki

## 受賞の言葉

液状化していく正当性の背後で、建前、嘘、教合わせ、といった政治的  
意思決定が蔓延るに至った現代がいよいよ「post-truthの時代」と名づけられて久しい今、この瞬間にも着々とわたしたちの暮らしへと侵入しようとする「大きな物語」の存在を日々暴きつつ、同時に限りなく小さな声、小さな物語の一粒一粒を包みこむことにこそ、ホラー  
「テイウスが『詩論』において正統としたムーサ（他者）を通して語りしめる共感体としての世界像と、現代において再び詩や散文を書くこと  
の意義が見出されていくことを願っています。この度いただいた選出により、力強い励みだけでなく、こうした持続可能性を改めて自  
覚した心地です。誠にありがとうございました。



青木聡汰

あおき そうた

1992 北海道札幌市生まれ

2016 第12回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞

2017年現在、東京藝術大学音楽学部作曲科に籍を置き、詩作とともに、合唱、管絃楽作品などの創作に励む

# ぼくらの詩

天ヶ谷麗

ぼくらだれもがまるで、家があるひとのようにして、帰る

ぼくらだれもがまるで、明日があるひとのようにして、帰る

ぼくらだれもがまるで、道があるひとのようにして、帰る

海の中では溺れる

陸の上でも苦しい

空にずっとはいられない

ぼくらどこで生きよう

生活の冷たいガスに病んで

息のある土左衛門になって

ばんばんになっても結局

屁をこいてごまかしていく

のか？

そうなのか？

ぼくらはそれを望むのか？

うつろな心ごとまるごと五感に引きこもる日々を、内向的で暗い近視眼的な生活を、オルガズムを侮辱する機械的な射精を、機能不全の人格を、欠損信仰のマゾでいることを、ぼくらはほんとに望むのか？

不安のための薬物。たとえば、偶像の無差別的な信頼、愛の曖昧な肯定、短絡的なポジティブ思想。潰れるほどに愛すべきは、そんな懶惰か？

路地裏の英雄に憧れて、鎧の性格を呪いのように硬くして、誰もいない戦場で息を殺して、一体誰を待っている？

緊張を鉛のように錆びつかせ、風と睦む枯れ葉にさえ怯え、聴覚過敏になってまで、自分さえ守れぬピストルを、構え続けるのはなぜだ？

五感がバリケードする部屋の隅で、出鱈目に聖書を読んで涙して、祈りの手を手垢の壁に擦り付け、雨のように降る一方的な愛を乞い願い、慈愛の顕現、神秘的な光の礫を夢想し、夢想し、夢想し！夢想する機械の夢を夢見ることが望むのか？

思い出の奴隷に成り下がり、おとぎ話を生きること、慣れてしまったのか？

優秀賞

のか？

そうなのか？

ぼくらはそれを望むのか？

薄暮れの哀れっぽい夕焼けを、情熱の焔とすり替える日に、悔恨の目録を唾棄して、今日の日を祝おう。満足の葉の煙草を吹かして、不満の種を灰にしよう。

ほら、歌を歌おう。不安の香りの微塵もない、楽しい歌を共に歌おう。歌い出せば、指揮棒は振られる。歌い出せば、音楽ははじまる。歌い出せば、星々は煌めく。歌い出せば、ぼくらは生まれる。

玉結びの夢を解いて

金色のスカートにして

ひらひらと飛ばすのだ

彼岸の蝶々さながらに

錆びた鉛の夢を溶かして

金色のボタンにして

胸ポケットを閉じるのだ

鼓動の太鼓がよく鳴るように

## 受賞の言葉

子供の頃から詩が好きでした。大人になった今も詩が好きです。理由は簡単です。楽しいから。それだけなんです。言葉を額縁に入れて持ち歩くのが楽しいんです。吐いた息を押し花にするのが楽しいんです。時々堪らなくなつてスキップをはじめくらしいです。

今回、ぼくと賞を繋いでくださった選者の皆様に心から感謝します。

本当にありがとうございました。



## 天ヶ谷麗

あまがや れい

1988 千葉県生まれ 茨城県龍ヶ崎市在住

2006 ロックバンド・ハイリナローゼ結成

2010 解散

12 明治学院大学社会学部卒業

14 ロックバンド・うかんむりクラブ結成

16 第12回「文芸思潮」現代詩賞・入選「攪拌された世界」

17 株式会社ゆるやか設立

「老犬ホーム・ペットホテルゆるやか」開店

現在、詩人・ミュージシャン・老犬介護士として活動中



# ドームの彼女

北森ミオ

## 優秀賞

ツルはもはや消えずの炎に燃え

半円球的歴史のあんぶれらは地上が忘我する感覚形象でしかここに在り得ず

彼女はハトをハトの形容に似つかわしい有様にするために心を砕き

彼女の子宮は大層一羽のハトを慈しみツルは幾千羽単位で祈りの限りにありますので

黒いドームは包括一罪であるね

色とりどりのツルは元安川で釣れます

ハトの餌には六日の井戸でよく煮えた赤い実の瓜がよろしいでしょう

よって彼女により磨かれたハトは包括継承されなければならない

などと

教えてくださったのは史学の先生だったか古文の先生だったか

衛生学か倫理哲学でもあったような

川に流れているのは人ではなくハトではなく  
彼女の縮んだツル型歴史的子宮なのです

赤い紙の肥えたツルが橋の上で列をなし困頓と川へ身を投げ流れましよう流れましよう  
う流れましよう流れましようもつと流れましよう流れましようもつと流れましよう

もとより磨いたハトは卵系の遺伝子を忘れ  
炎に近いツルは羽を広げようと熱風熱線浴び  
時の下へと流れるばかり流れるばかり流れるばかり

### 受賞の言葉

作品を選んでくださりありがとうございます。もう何年も夢現の旅をしています。そこで見えること、聞こえること、感じることを少しでも残したいと思い、言葉を書かれています。言葉で表せること、言葉で表せないこと、言葉では追いつかないこと、言葉だけが先に行ってしまうこと、言葉以上、言葉以下……風景は様々に変生し行き交う人々も変わります。まだまだ旅の途中です。哀しみで動けなくなることも多く困難な旅ですが、この場所に出会えたことに深く感謝いたします。



北森ミオ

きたもり みお

広島市在住

詩、小説、脚本など執筆

「詩とメルヘン・花」展入賞

「星の砂文庫」審査員奨励賞

「時空モノガタリ」文学賞

「広島市民文芸詩部門」一席など

小説「星夜行」（パロル舎）販売中